

特集「国際標準化による日本産業の復活」を企画して

特集担当編集委員 島岡 治夫、河島 睦泰

技術や製品がいかに優れていても、国際規格から外れてしまえば、グローバルなビジネス展開ができず、さらに日本国内においてさえ海外製品にシェアを奪われる結果になってしまう場合がある。オリンピックのルール改変に象徴されるように、日本および日本人は国際標準化に遅れをとり、国際競争力を喪失し、何度も煮え湯を飲まされてきた。それにもかかわらず、いまだに国際標準化に関する日本人の一般的な認識は低く、明確な戦略を持たないままに技術的な優位性をビジネスに生かせず、ガラパゴス化し、後発の海外製品に市場を奪われてしまうケースが繰り返されている。技術にこだわり、多国間の交渉力やロビー活動を軽視する傾向も状況を悪化させている。これが日本製品の国際競争力の低下を招き、日本経済が低迷している要因のひとつになっているのかもしれない。

欧米先進国だけでなく中国、韓国などの新興国においても自国に有利な国際規格をつくり、グローバル市場の制覇を着々と進めている。

このような状況を背景に、経済産業省は、「トップスタンダード制度」を新設し、日本が得意とする分野において新たな国際規格を迅速につくり、新産業を創出し、日本産業復活のきっかけを作ろうとしている、その最初のテーマのひとつとして選択されたのがファインバブル（微細気泡）技術であり、産学官を巻き込んだ活動がかつてないスピードで推進されている。

独産業技術総合研究所の矢部彰先生および松田宏雄先生には、「産業技術総合研究所における国際標準化の取り組みについて」と題して、独産業技術総合研究所が果たす役割の重要性と実績、さらに現在の取り組みについてご紹介いただいた。ファインバブルにおいても、長年研究を進めてきた技術がコアの一つとなり、それを中心に産学官がまとまり、連携することによって活動が促進されている。

独産業技術総合研究所の綾信博先生には、「粒子測定技術に関連する規格の調和・整合の戦略 — R&Dを新たな産業創造に効率的に繋げる方策 —」と題して、既存の規格を迅速かつ効率的に関連・応用規格へ展開するための戦略について述べていただいた。実際に、ISO TC24/SC4と新設された TC281が連携・合同し、かつてないスピード作業を進めるための調整が綾先生を中心に進められている。まさに世界をまたにかけ八面六臂の活動をされている。

（一社）微細気泡産業会の木戸達雄氏には、「トップスタンダード制度とファインバブルの国際標準化」と題して、経済産業省が新設したトップスタンダード制度とそれを活用したファインバブルの国際標準化、さらに市場拡大の可能性についてご紹介いただいた。従来は、まず JIS 規格を作り、その上で国際規格化するのが通例であったが、本件はこのステップを踏まずに当初から国際規格を作ろうとしている。萌芽の段階にある新技術を育成し、日本が国際競争力を有するグローバルな産業に発展させるためである。

IDEC 株の藤田俊弘氏には「ファインバブル技術の国際標準3階層体系構築による新産業創造 — 国際安全規格体系に学びファインバブルカンツリー倶楽部の創成に向けて —」と題して、新産業創出と国際競争力の確保における国際標準化の重要性について、実績とともに、ゴルフ場（カンツリー倶楽部）の例なども交えてわかりやすく説明していただいた。藤田氏は、ファインバブルの国際標準化においても、内外の豊富な人脈を背景に、大馬力のエンジンとして活動全体を牽引・促進されている。

慶應義塾大学の寺坂宏一先生には、「ファインバブルの基礎と応用および研究課題」と題して、国際標準化の対象になっているファインバブルの基本と可能性についてご紹介いただいた。これを読んでいただくことによって、新産業創出のコア技術としてのファインバブルの可能性および魅力と、この技術に対してトップスタンダード制度が適用されることになった背景がご理解いただけるものと思う。

桜美林大学大学院の原田節雄先生には、「JR 東日本のスイカ（ソニーの FeliCa）国際標準化の顛末」と題して、ご自身の経験をもとに技術的議論だけに留まらない各国の利害のぶつかり合いについて語っていただいた。国際標準化においてはロビー活動を含めて、タフな交渉力が要求されることがわかる。原田氏は、その経験を生かしてファインバブルの国際標準化においても（一社）微細気泡産業会顧問として、日本が主導的立場を維持するための戦略・戦術を練られている。